

大月町埋蔵文化財調査報告書第7集

高知県幡多郡大月町

尻貝遺跡Ⅱ

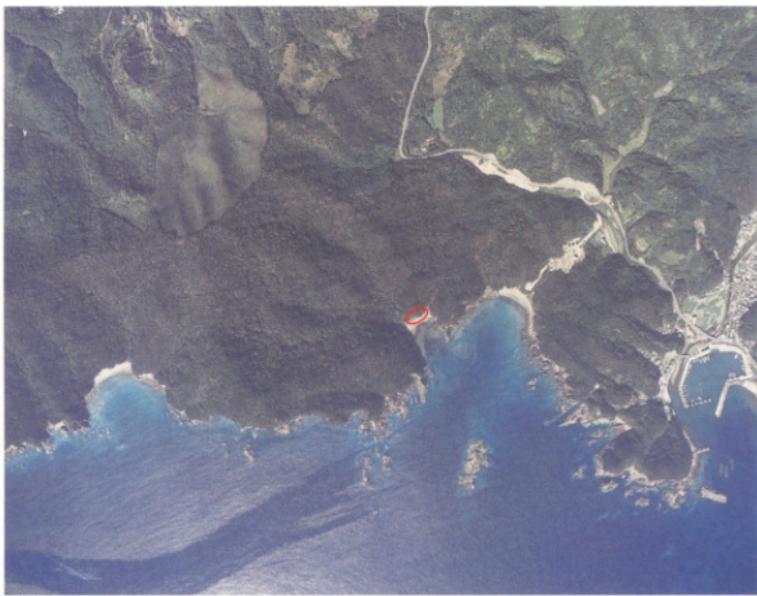
2007.3

高知県幡多郡大月町教育委員会

高知県幡多郡大月町
尻貝遺跡 II

2007.3

高知県幡多郡大月町教育委員会



空撮



調査前風景

巻頭カラー2



出土土器



出土石器

序

大月町は、面積の大部分が丘陵で占められ、太平洋と豊後水道に面した自然豊かな町です。尻貝遺跡は、足摺宇和海国立公園の保護区域内の海辺に所在します。

1984（昭和59）年に宿毛市に在住する釣り人に発見され、1989（平成元）年に一度、学術調査を行いました。調査では、愛媛県及び豊後水道を隔てた九州との交流が盛んであったことが窺える縄文時代の土器片と、漁撈を物語る石錐が出土しています。

今回は、波打ち際からわずか20m程の場所で、暴波などにより侵食が進んでいる部分について調査を実施しました。出土遺物は前回と同様、縄文時代の土器片、石斧、石錐などで、尻貝遺跡が所在する小さな入り江からは、私たちの先人が眼前の海で漁撈を営み、後背の山や谷川で狩りを営んでいた様子を窺い知ることが出来ます。現代社会に生きる私たちが、忘れてはならない生活の原点がここにあるような気がします。

本書が、地域史及び斯学の向上に少しでも貢献できますことを願う次第であります。

最後になりましたが、調査の実施、報告書の作成にあたりましては関係各位から多大なご協力とご指導をいただきました。また、本事業を実施するにあたりまして、環境省自然環境局土佐清水自然保護官事務所及び四万十森林管理署の深いご理解とご協力を頂きました。厚く感謝致します。

2007年3月

大月町教育委員会
教育長 長山 健二

例　　言

1. 本書は、幡多郡大月町教育委員会が実施した尻貝遺跡試掘確認調査の成果をまとめた報告書である。
2. 尻貝遺跡は、大月町周防形（国有林）尻貝山304林班に所在する。
3. 調査は、国庫・県費補助金の交付を受け、高知県教育委員会の指導のもと大月町教育委員会が実施した。
4. 調査は2004（平成16）年8月10日～9月15日に行われ、面積は約20m²である。
5. 本書の編集は大月町教育委員会が行い、実務及び執筆は坂本が行った。現場写真は必要に応じて調査員が撮影した。
6. 石器実測・遺物写真是財高知県文化財団埋蔵文化財センター 次長 森田尚宏氏の協力を得た。
7. 発掘調査及び執筆では、森田尚宏氏、前田光雄氏よりご指導、ご助言、ご協力を得た。記して感謝します。
8. 調査は次の体制で行った。

調査担当－大月町埋蔵文化財発掘調査員 坂本由美子

事務全般－大月町教育委員会社会教育係 係長 宮崎幹男・主任 乾 夏夫

9. 調査にあたっては、次の方々のご協力を得た。

野町和人 宗崎重孝 森下英昭 安田淳平 吉松純樹 中村健太郎 安岡勇志 中野良介
中平和雄 中平 宗 松田修一 松田将臣

10. 本事業を実施するにあたり、環境省自然環境局 土佐清水自然保護官事務所及び四万十森林管理署の深いご理解とご協力を頂いた。厚く感謝の意を表したい。

11. 本書の発刊にあたり、以下の機関の方々から指導及び助言を賜った。記して感謝したい。
高知県教育委員会 文化財課 財高知県文化財団埋蔵文化財センター 四十万市教育委員会
徳愛媛県埋蔵文化財センター
12. 今回の遺跡で出土した遺物等は略号「04-OS」とし、遺物等資料の保管は大月町教育委員会が行っている。

目 次

巻頭カラー

序

例 言

本文目次

第Ⅰ章 調査の経緯及び遺跡の環境

第1節 調査の経緯	1
第2節 遺跡の環境	2

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査区の設定	3
第2節 土層堆積状況	4
第3節 出土遺物	5
第Ⅲ章 総括	9

挿図目次

第1図 大月町位置図	1
第2図 調査区位置図	1
第3図 尻貝遺跡周辺地形図	2
第4図 平面図	3
第5図 垂直分布図	3
第6図 セクション図	4
第7図 出土土器実測図（1～10）.....	6
第8図 出土石器実測図（11～15）.....	7

表 目 次

出土土器観察表	8
出土石器観察表	8

写真図版目次

巻頭カラー 1	空撮	調査前風景
巻頭カラー 2	出土土器	出土石器
図版 1	セクション	作業風景 1
図版 2	作業風景 2	作業風景 3
図版 3	作業風景 4	完掘状態
図版 4	遺物出土状況 1	遺物出土状況 2
図版 5	出土遺物 1	出土遺物 2
図版 6	出土遺物 3	

第1章 調査の経緯及び遺跡の環境

第1節 調査の経緯

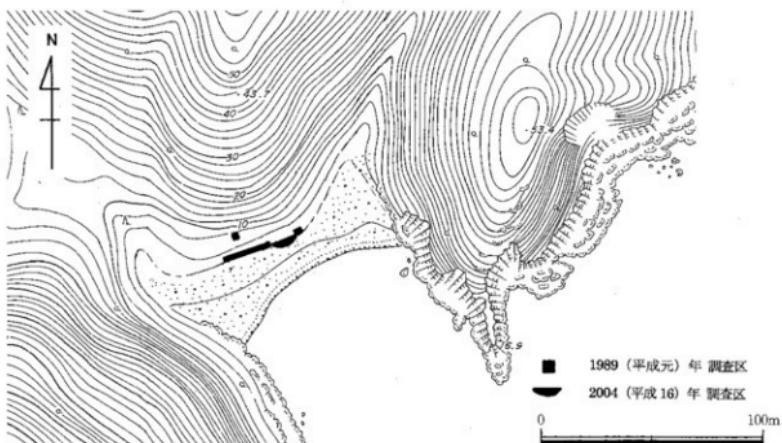
尻貝遺跡は、小入江の海岸に面した山麓部に所在する。崩壊した法面から縄文土器片が露出しているところを、1984(昭和59)年に宿毛市よりこの地に訪れた釣り人が発見した。

大月町教育委員会は1989(平成元)年9月25~28日の間、高知県教育委員会の協力を得て学術調査を行い、短期間ながら縄文土器片約500点と、弥生時代~古墳時代にかけての高杯、甕、製塙土器と考えられる破片、打製石斧を各1点検出した。その結果西南四国の中城式と、九州に分布圈を持つ鎌崎式土器を主体とする貴重な遺跡であることが判明した。

今回の試掘確認調査は、町内遺跡巡視調査時に崩れた遺跡の断面から土器片が露出しているところを発見したことによるものである。調査に先立ち、環境省自然環境局土佐清水自然保护官事務所の自然保护官と現地踏査を行い、協議の結果、消滅の可能性が考えられる部分について実施することとした。また、樹木の伐採は四万十森林管理署の許可を得て行った。



第1図 大月町位置図

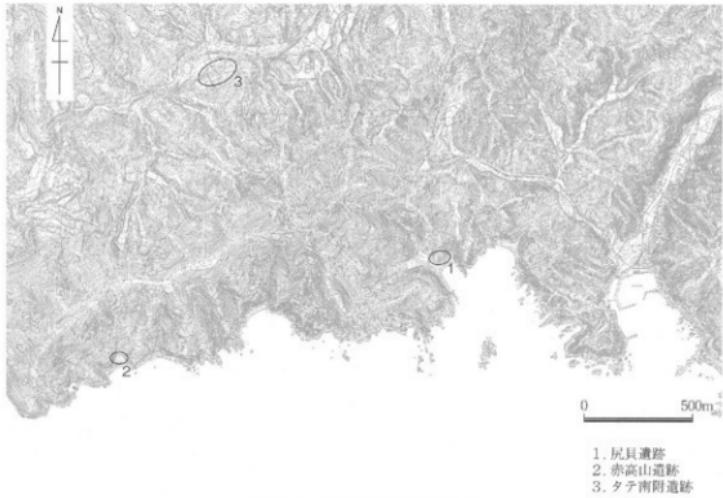


第2図 調査区位置図

第2節 遺跡の環境

大月町は高知県の西南端に位置し、尻貝遺跡は太平洋に面した足摺宇和海国立公園の保護区域内に所在する。遺跡は町道から「四国の道」を徒歩で20分程の海岸線に立地する。小さな入江で両側には水量豊富な沢が流れる。この尻貝遺跡が所在する海岸線には他にも同じような立地条件の小入江がいくつかあり、遺跡より西側の港口附近でも1998～1999（平成10～11）年の分布調査時に縄文時代の可能性を秘めた土器片を数点採集し、2000（平成12）年2月、赤高山遺跡とし遺跡台帳に登録した。また、尻貝遺跡の北西約1.5km付近でも、加工痕のある大分県姫島産黒曜石の剥片を採集し、同時期にタテ南附遺跡とし遺跡台帳に登録した。

大月町の地質は、中筋地溝帯の北縁を東西に走る中筋構造線以南の四万十帯の南帶に含まれる。南帶は幡多層群と三崎層群に分かれ、幡多層群は北から順に平田層、竜ヶ迫層、弘見複合層、来栖野層、清水層、田ノ口層により構成されているが、尻貝遺跡周辺は来栖野層に属する。来栖野層は主に砂岩と泥岩からなる単調な岩相であり泥質岩はしばしば粘板岩質となっている。

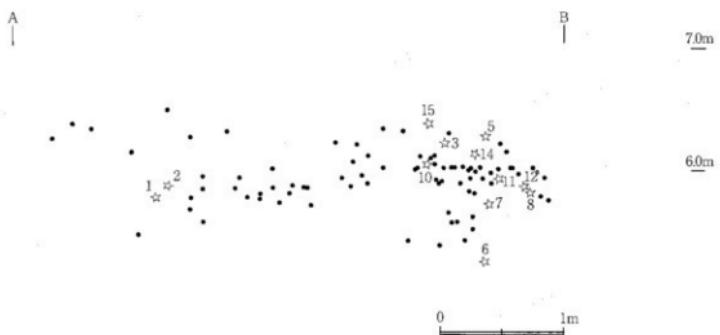
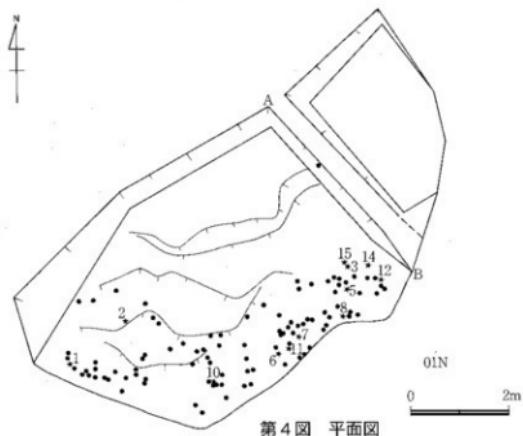


第3図 尻貝遺跡周辺地形図

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査区の設定

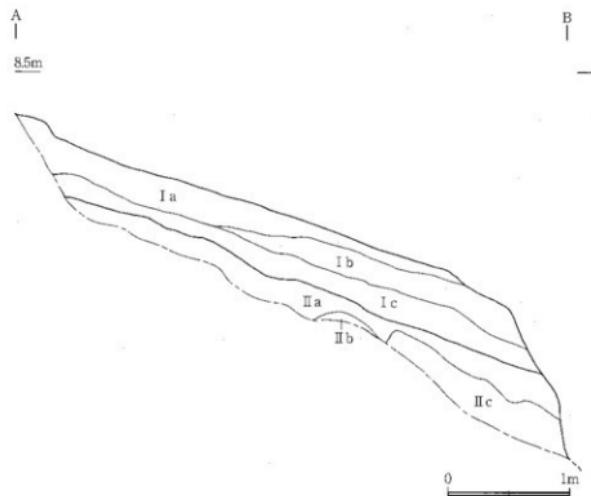
調査対象区は、包蔵地の一部であり小入江の中央附近で山裾が海岸に迫り出し、波に洗われ侵食が進んでいる部分約20mと、小規模な調査である。調査区にはバックホーが進入できないため、雑木の抜根、表土の除去等すべて人力による手掘りで行い、廃土の処理のみは小型運搬機を利用した。調査区は半円形を呈しており、その東側から1/3のところに幅約45cmのバンクを設定し、堆積土層の確認を行なながら造構及び遺物の検出に努め地山まで掘り下げた。出土した遺物についてはドットでの平面分布図を作成し、出土レベルと出土層位の記録を行った。また、必要に応じ出土状況の写真記録も行った。



第2節 土層堆積状況

層序は堆積状況により大きく第Ⅰ・Ⅱ層に分けた。堆積層は表面約20°、地山約25°の傾斜を測り、層厚は、第Ⅰ層は比較的平行で40~50cm、第Ⅱ層は10~60cmを測る。第Ⅰ層は黒褐色の腐植土で二次堆積層であると考えられ、a、b、cの3層に分離される。Ⅰa層は腐植土による表土層である。Ⅰb層は腐植土中に円礫が混入するが、これらの円礫は、海から打ち上げられ堆積したと考えられる。Ⅰc層は腐植土中に山から崩落したと考えられる礫角礫が混入する。第Ⅱ層は遺物包含層であり、やはりa、b、cの3層に分離される。Ⅱa層は暗褐色砂質土で、大礫が混入する。Ⅱb・Ⅱc層は褐色土であり、鬼界アカホヤ火山灰の混入が認められる。遺物は主にⅡa・Ⅱc層に混入する。

第Ⅰa層	黒褐色腐植土（表土層）(7.5YR2/2)
第Ⅰb層	黒褐色腐植土（円礫混入）(7.5YR2/2)
第Ⅰc層	黒褐色腐植土（角礫混入）(7.5YR2/2)
第Ⅱa層	暗褐色砂質土（遺物包含層）(7.5YR3/4)
第Ⅱb層	褐色土（鬼界アカホヤ火山灰混入）(7.5YR4/3)
第Ⅱc層	褐色土（鬼界アカホヤ火山灰混入）(7.5YR4/4)



第6図 セクション図

第3節 出土遺物

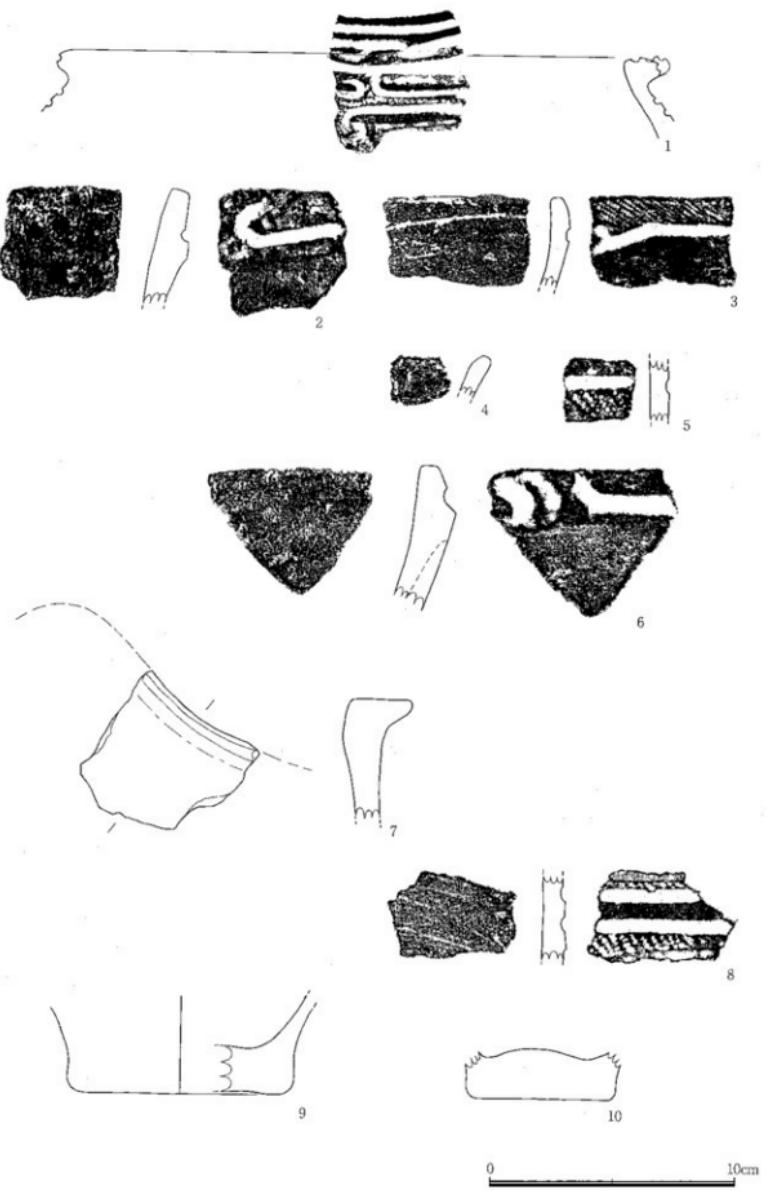
今回の試掘確認調査による出土遺物は土器片219点、石器13点であり、約20m²という小発掘区の出土遺物としては多量の土器片が出土している。前回調査の出土土器も含めると未調査部分の包含層中にはかなり多量の遺物が含まれているものと思われ、遺跡の中心部に近いと考えられる。出土土器片の点数は多量であったが海岸線の立地であり、波に洗われる状況からして細片が多く、図化できる遺物は少数であった。以下に図化できた遺物について述べる。

出土土器

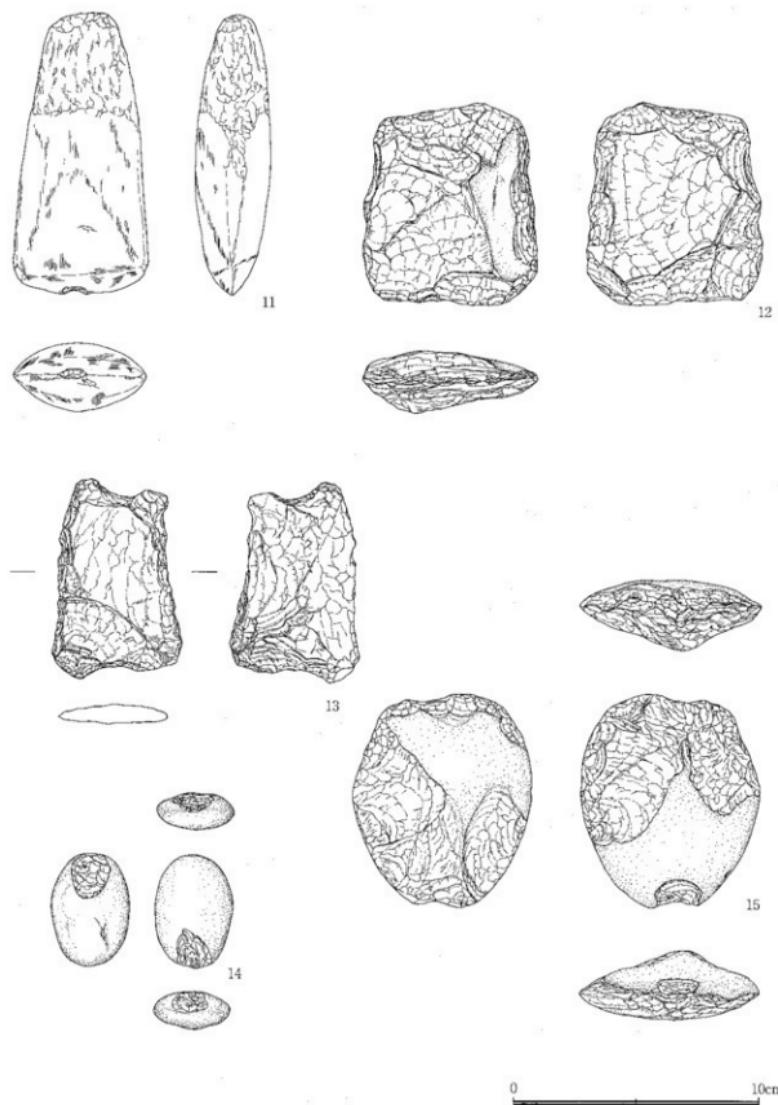
1・4・5・8は平城I式の土器片であると考えられる。1・4は口縁部である。1は口唇上部及び口唇端部に沈線を巡らし、瘤状突起を有する。入組文、磨消繩文を施す。4は細片で口唇部は丸みをなし、無文である。5・8は体部に磨消繩文を施す。繩文原体はRLでやや太い。2・3・6・7は平城II式の口縁部であると考えられる。2は口縁の外面に沈線を施す。沈線端部は上方にきつくる屈曲する。3は口唇下に沈線を有する。繩文原体はRLで細い。6は口縁の外面に弧線及び端部を屈曲する沈線を有する。7は無文で、波状口縁の傾斜部と思われる。9・10は平底の底部である。9は底裏僅かに窪み、体部器は肉薄である。10は底部器肉厚でやや梢円を呈する。

出土石器

11は磨製石斧である。基部を中心に上部1/3に敲打痕を残し研磨する。下部は2/3はよく研磨され表面は平滑である。刃部は右側に若干カーブしており使用の結果と見られる。一部に刃こぼれが認められる。また、刃部には横位の線条痕が部分的に見られる。やや大形であり、重量感もあるので伐採斧として使用されたものと考えられる。12は打製石斧であり四辺ともに剥離により整形する。形態から見ると正方形に近く、破損したものを再利用した可能性がある。13は8.2cmを測り、上下端に抉りを有する。下端の抉りは浅く幅広である。両側縁ともに加工調整を施し、右側縁はやや内湾する。上下端の抉り部分と右側縁部に摩滅痕が認められ、削器的な機能も考えられる。重さは49gを計る。14・15は砂岩製の石錐である。14は小扁平礫を使用し、表裏面に上下からの剥離が行われている。15は大形の石錐で、上下に浅い抉りを持つ。表面は下部を大きく剥離し、裏面は上部を左右から大きく剥離する。一部に残る礫面は平滑であり、海岸礫を素材としている。



第7図 出土土器実測図（1～10）



第8図 出土石器実測図 (11~15)

出土土器観察表

図 No.	種類	出土 層位	器種	法量(cm)			特徴	内面	外面	断面	土器型式
				口径	器高	底径					
1 繩文土器	II	口縁部	Z28	3.2	-	-	口縁端部突起。入組文。磨消撰文。	SYR4/4 にぶい褐色	SYR4/5 にぶい赤褐色	7SYR4/4 にぶい褐色	平城I
2 繩文土器	II	口縁部	-	3.9	-	-	口縁外面施文。	10YR6/6 明黄褐色	10YR6/7 明黄褐色	10YR3/1 黒褐色	平城II
3 繩文土器	II	口縁部	-	3.5	-	-	縄文断体R1。原体細い。	7SYR5/4 にぶい褐色	10YR6/4 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	平城II
4 繩文土器	口縁部	-	1.7	-	-	-	口縁端部丸みを帯びる	SYR7/6 橙色	SYR6/6 橙色	SYR6/6 橙色	平城I?
5 繩文土器	II	-	2.6	-	-	-	磨消撰文。縄文原体R1。原体やや太い。	7SYR4/6 褐色	7SYR4/6 褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	平城I
6 繩文土器	II	口縁部	-	5.8	-	-	口縁外面施文。弧離文。沈底端部鋸歯。外下部斜付行。	10YR5/6 明黄褐色	(駆付部: SYR (5/6) 明赤褐色)	10YR5/6 にぶい黄褐色	平城II
7 繩文土器	II	口縁部	14.5	4.7	-	-	彼状口縁。上面施文?	SYR5/6 明赤褐色	SYR5/6 明赤褐色	7SYR4/3 褐色	平城II
8 繩文土器	II	頂部	-	3.4	-	-	磨消撰文。縄文原体R1。原体やや太い。	7SYR4/6 褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	平城I
9 繩文土器	底部	-	4.0	9.3	-	-	底部點やくぎれ。	2SYR4/6 赤褐色	7SYR4/3 褐色	7SYR4/3 褐色	
10 繩文土器	II	底部	-	2.0	6.1	-	平底。	7SYR4/3 褐色	7SYR4/3 褐色	7SYR4/3 褐色	

出土石器観察表

図 No.	器種	法量				石材	特徴		
		cm	cm	cm	g				
		全長	全幅	全厚	重量				
11 磨製石斧	11.50	5.60	2.80	256.00	綠色玄武岩	基部を中心に上部敲打痕を残し削創する。下部は研磨された表面は平滑である。			
12 打製石斧	8.30	7.15	2.50	157.00	砂岩	四辺とともに剥離により彫形する。表面の一部に擦痕を残す。			
13 異形石器	8.20	5.40	0.80	49.00	軽板岩	上下端に抉りを入れる。両側面も剥離により彫形する。			
14 石錐	4.60	3.20	1.50	27.00	砂岩	小基盤面を使用した石錐。表面に上下からの剥離が行われている。			
15 石錐	5.80	7.40	2.90	188.00	砂岩	大型の石錐。表面は下部を大きく剥離し、裏面は上部を左右から大きく剥離する。			

第Ⅲ章 総括

2004（平成16）年8月10日～9月15日の間に、国庫補助事業として実施した尻貝遺跡保存のための調査の成果についてまとめる。

出土土器

1989（平成元）年の調査では、縄文土器片約500点と、弥生時代～古墳時代にかけての高杯、壺、製塙土器と考えられる破片を各1点検出している。縄文土器片は主に平城式と、九州に分布圏を持つ鐘崎式土器を主体とするものである。今回の調査で出土した土器片は219点で、細片が多いが、平城式を中心とするものである。

高知県下での最近の調査事例では、南国市田村遺跡で平城式、鐘崎式が纏まって出土しており、九州以外では鐘崎式の出土量は最多と言われる。平城式は量的には多くないが、所謂平城I式に含まれるもので、鐘崎式は鐘崎II式に相当するものである。両者は地点を離れて出土する傾向にあり、編年的に平城I式から鐘崎II式に変遷する豊後水道圏と同様のあり方を示している。尻貝遺跡と田村遺跡の相違点は、尻貝遺跡では平城I式、平城II式、鐘崎II式の3型式が出土しているが、田村遺跡では平城II式が欠落していることをあげることができる。この相違点は、時間的な差異なのか、地域的な差異のかは判然としない。

出土石器

今回の調査で出土した石器は、石錘、石斧が数点と異形石器、敲石が各1点である。石錘はおおむね大形なものであるが、27gの小扁平錐を使用したものが1点出土した。これは投網や建網漁に使用したと考えられる。磨製石斧は縄文後期に出土例が多い乳棒状石斧に近い形態のものである。柄の部分が細く、若干形態が異なるが、乳棒状石斧に含まれるものと考えられる。13の抉入のある異形石器は、高知県本山町松ノ木遺跡で両端部に抉入を施した抉入石器が比較的纏まって出土している。形態的には類似するが、松ノ木遺跡例はサヌカイトで占められている。しかし、尻貝遺跡のものは粘板岩であり、また時期的な差異がある。土器型式的には松ノ木式、平城式、鐘崎式の流れが南四国の型式変遷と考えられており、松ノ木遺跡のものは松ノ木式、尻貝遺跡のものは平城式または鐘崎式に伴うと考えられる。松ノ木遺跡の事例については使用痕観察を行っているが、サヌカイトであることから風化が進んでおり、使用痕は不明のままである。本遺跡のものは使用痕の観察は行っていないために判然としない。立地条件からすると稻作に伴う石器と考えるのは困難であり、削器かそれに類する機能が考えられる。

集落

遺跡の立地は、常時波に洗われるような状態の海岸線であり、かなり特徴的な立地といえる。縄文時代後期と現在の海岸線の位置には相違があると考えられるが、海を強く意識した立地であり、石錘の出土から見れば生業として漁撈の占める割合が高かったものと推定される。しかし一方では

石斧の出土もあり、漁撈以外の狩獵・採集の存在も否定はできない。海岸には山が迫っており、一般的な集落の立地としては厳しい環境にあると思われる。傾斜地の小規模な調査で、遺構の検出には至っておらず、全体像の把握と未調査部分の保護が今後の課題である。

町内における縄文時代の遺跡としては、尻貝遺跡の他に、小谷山遺跡、コヤケシタ遺跡、ヤナセ川遺跡、タテ南附遺跡、カルモカ遺跡、ムクリ山遺跡、ナシケ森遺跡、ナシケ森Ⅱ遺跡などが存在するが、これらは主に町の内陸部を中心に所在し、尻貝遺跡、また赤高山遺跡のような海岸線に立地する遺跡は少なく、特異な例である。

四万十川流域における縄文後期遺跡の増加と、石錐等の漁撈関係の遺物を多く出土することから、漁撈的性格を強く受けて形成された集落であったと考えられる。

【参考文献】

- 大月町史編纂委員会：1995.3「大月町史」
高知県教育委員会・財高知県文化財団埋蔵文化財センター：2004.3「田村遺跡群Ⅱ」
前田光雄：1991.3「尻貝遺跡」大月町教育委員会
前田光雄・魚島純一他：2000.3「松ノ木遺跡」高知県長岡郡本山村教育委員会
木村剛朗：「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研
松村信博・山本純代：1999.3「奥谷南遺跡Ⅰ」財高知県文化財団埋蔵文化財センター
三好恵介・與原和秋・多田仁：「犬除遺跡」愛媛県北宇和郡津島町教育委員会
愛媛県歴史文化博物館：2001.7「西四国の縄文文化」
「四国地方－日本の地質8」編集委員会：1991「四国地方－日本の地質8」共立出版株式会社
平 輝彦：1990「日本列島の誕生」岩波書店

写真図版



セクション



作業風景 1

図版2



作業風景2



作業風景3



作業風景 4

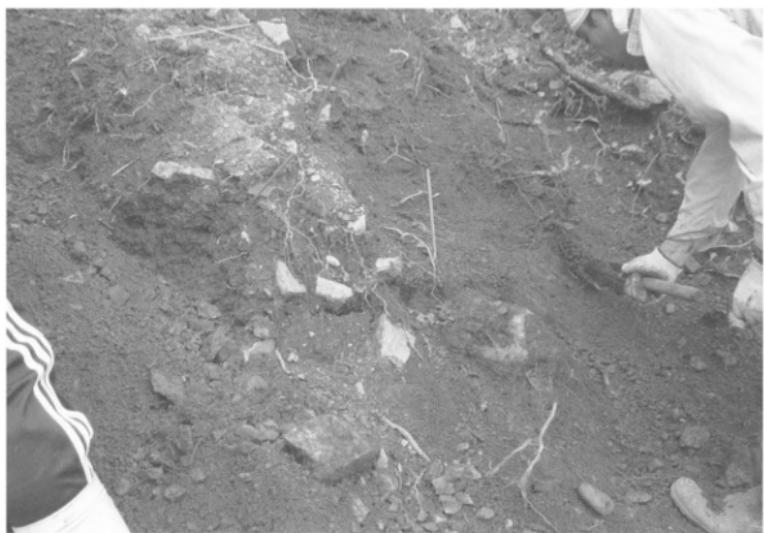


完掘状態

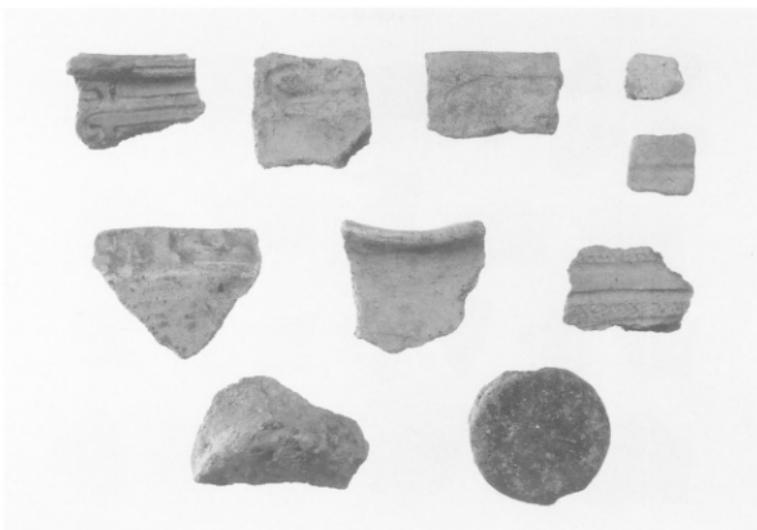
図版 4



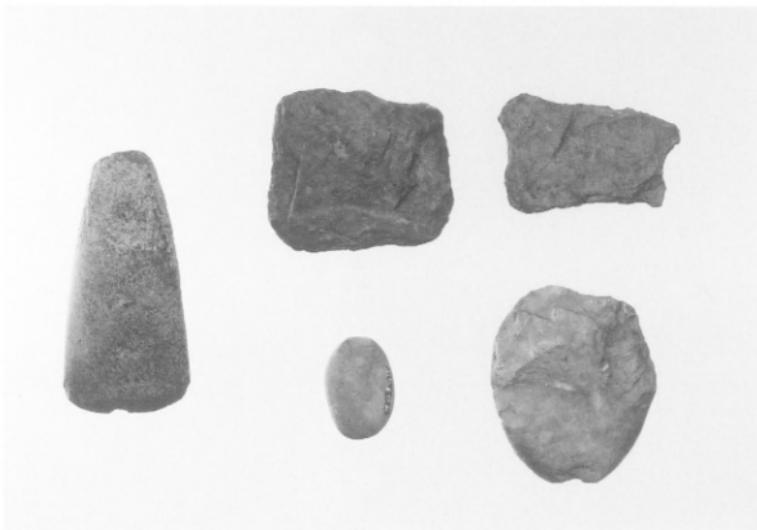
遺物出土状況 1



遺物出土状況 2

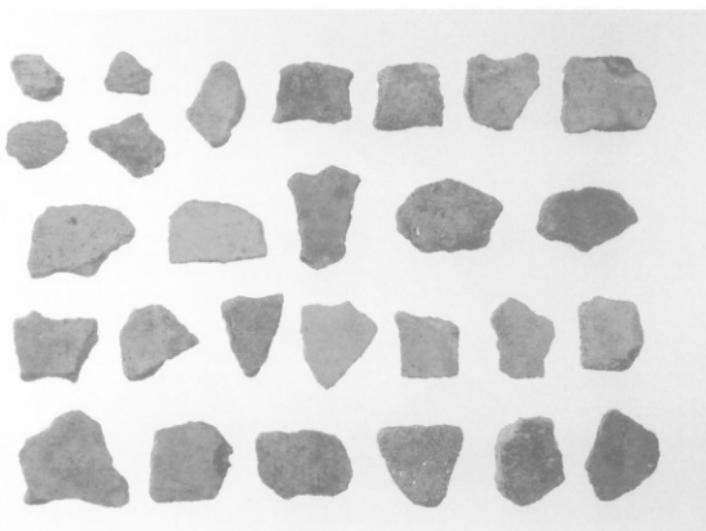


出土遺物 1



出土遺物 2

図版 6



出土遺物 3

報告書抄録

大月町埋蔵文化財調査報告書

- 第1集 『尻貝遺跡』 1991
- 第2集 『竜ヶ迫遺跡・ムクリ山遺跡』 1994
- 第3集 『大月町文化財地図』 2000
- 第4集 『ナシケ森遺跡』 2001
- 第5集 『ムクリ山遺跡』 2005
- 第6集 『ムクリ山遺跡II』 2007
- 第7集 『尻貝遺跡II』 2007

大月町埋蔵文化財調査報告書 第7集

尻貝遺跡 II

編集・発行 大月町教育委員会
高知県幡多郡大月町弘見2230番地
電話 0880-73-1111（代表）
発行日 2007年3月31日
印 刷 西村謄写堂